〔研究ノート〕

明代沈周の「落花詩」について

一大風流韻事発端の十首

鷲 野 正 明

はじめに

明の弘治十七年（一五〇四）、多くの文人が参加して「落花詩」を酬唱する風流韻事が行われた。発端は、沈周が「落花詩」十首を作って文徵明に示したことに始まる。沈周の「落花詩」を読んだ文徵明と徐禎卿がそれぞれ和答して十首作ると、沈周は喜んでその反しに再び和して十首作った。その歳、文徵明が南京に至り太常卿呂憲に謁し、「落花詩」を示すと、呂憲が賛嘆し、羨んで十首を和し、沈周がまた呂氏に和して十首作ったのであった。沈周は総計三十首作ったことになる。しかも沈周は、すべてその日のうちに再反再和したという。

その年の十月、文徵明は沈周の三十首、自分のものと徐禎卿・呂憲の各十首、合わせて六十首を小楷で書いて一巻とした[(1)]。これに、さらに唐寅や遠近の多くの文人が酬唱して、一大風流韻事として後世にまで喧伝されることになった。唐寅の「落花詩[(2)]」は、文徵明の書とともに書道界に広く知られている。

文徵明の真跡は、その影印が中國名家法書全集名家翰墨 18『文徵明／小楷書落花詩』（翰墨軒出版有限公司、二〇〇一年三月）によって見ることができる。「落花酬唱」は清の光緒年代顧文彬によって『過雲楼帖』に刻成された。これもまた、『文徵明／小楷書落花詩』に収載されており、巻末には啓功の「文徵明的原名和他寫的《落花詩》」と自書の識語が付いている。

「落花詩」の書・画は、書家や画家に広く知られるが、詩そのものについて論じたものは管見の及ぶ限り見受けられない。そこで本稿では沈周の最初の十首について、詩の内容・構成・連作詩としてのおもしろさについて考察してみたい。なお定本には上記の『文徵明／小楷書落花詩』を用い、字体もこれに従う。詩は便宜上配列順に番号を付し、剥落して文字が判読できない個所は、顧文彬『過雲

楼帖』や『沈周集[3]』によって補い、異体字は現行の文字に改める。

沈周は、字啓南、石田・白石翁と号した。長洲県相城里（蘇州）の人。明の宣徳二年（一四二七）に生まれ、正徳四年（一五〇九）八十三歳で没した。生涯一度も仕官せず民間に隠れ住み、詩画を善くした。「落花詩」を詠ったとき七十八歳だった[4]。

（１）文徵明の「落花詩」跋に次のように云う。

弘治甲子之春、石田先生賦落花之詩十篇、首以示璧。璧與友人徐昌穀屬而和之。先生喜、從而反和之。是歳、璧計隨南京、謁太常卿呂公、又屬而和之。先生益喜、又從而反和之。其篇皆十而先生之篇累三十。皆不更宿而成、成益易而語益工。其爲篇益富而不窮益奇。

（２）『唐伯虎全集』（周道振・張月尊輯校、中国美術学院出版社、二〇〇二年三月）巻二に見ゆ。唐寅の本邦における専著に『唐寅』（内山知也監修、明清文人研究会編、白帝社、二〇一五年十一月）がある。

（３）王衛平主編『沈周集』上下（蘇州文獻叢書第二輯、上海古籍出版社、二〇一三年六月）

（４）沈周の生涯とその志、文芸については内山知也『明代文人論』（木耳社、一九八六年十一月）に詳しい。

一、「落花詩」のテーマと十首の概要

落花詩は、花が散り、春の去るのを惜しみ、そこに人生の春が空しく去ることを重ね、人の世の無常を詠うのが一般的である。また、花を詩材にすることから、女性が重ねられ、妖艶と衰残とをからめて無常を強調することにもなる。落花、惜春、無常は、いわば漢詩の一つの大きなテーマであり、その先例を挙げればきりがないが、例えば劉希夷の「代悲白頭翁」は「落花」とは題していないが、落花、惜春、無常を詠う代表と言えよう。沈周の「落花詩」も落花の諸相をとおして、惜春、無常が詠われる。

沈周の「落花詩」十首を、首聯・頷聯・頸聯・尾聯に分けて対応させると下表のようになる。また、十首それぞれの四聯の構成は、おおむね次のようである。

首聯　花が散ることを言う。現在散っている、あるいは、あっという間に散る等、落花の諸相を描写する。

頷聯　花が散ってどのような状態になっているかを言う。

頸聯　前半の二聯を承けながら、視点を変える。

尾聯　花（春）への愛惜や無常を詠う。

沈周落花詩

	首聯	頷聯	頸聯	尾聯
1	富逞穠華滿樹春 香飄落瓣樹還貧	紅芳既蛻仙成道 綠葉初陰子養仁	偶補燕巢泥薦寵 別修蜂蜜水資神	年年爲爾添惆悵 獨是蛾眉未嫁人
2	飄飄蕩蕩復悠悠 樹底追尋到樹頭	趙武泥塗知辱雨 秦宮脂粉惜隨流	癡情戀酒粘紅袖 急意穿簾泊玉鉤	欲拾殘芳搗爲藥 傷春難療個中愁
3	是誰揉碎錦雲堆 着地難扶氣力頽	懊惱夜生聽雨枕 浮沈朝入送春杯	梢傍小剩鶯還掠 風背差池鳩又催	瞥眼興亡供一笑 竟因何落竟何開
4	玉勒銀罌已倦遊 東飛西落使人愁	急攙春去先辭樹 嬾被風扶強上樓	魚沫劬恩殘粉在 蛛絲牽愛小紅留	色香久在沈迷界 懺悔誰能倩比丘
5	昨日繁華煥眼新 今朝瞥眼又成塵	深關羊戸無來客 漫藉周亭有醉人	露涕烟洟傷故物 蝸涎蟻迹弔殘春	門墻蹊逕俱零落 丞相知時卻不嗔
6	十二街頭散冶遊 滿街紅紫亂春愁	知時去去留難得 悟色空空念罷休	朝掃尚嫌奴作踐 晩歸還有馬堪憂	何人早起酬憐惜 孤負新粧倚翠樓
7	夕陽無那小橋西 春事闌珊意欲迷	錦里門前溪好浣 黃陵廟裏鳥還啼	焚追螺甲教香史 煎帶牛酥囑膳嫒	萬寶千鈿眞可惜 歸來直欲滿筐携
8	一園桃李只須臾 白白朱朱徹樹無	亭怪艸玄加舊白 窓嫌點易亂新朱	無方漂泊關遊子 如此衰殘類老夫	來歲重開還自好 小篇聊復記榮枯
9	芳菲死日是生時 李姝桃娘盡欲兒	人散酒闌春亦去 紅銷綠長物無私	青山可惜文章喪 黃土何堪錦繡施	空記少年簪舞處 飄零今日髣如絲
10	供送春愁上客眉 亂紛紛地竚多時	儗招綠妾難成些 戲比紅兒殺要詩	臨水東風撩短髩 惹空晴日共遊絲	還隨蛺蝶追尋去 牆角公然隱半枝

頷聯以降はそれぞれの詩ごとに展開されるが、首聯はそれぞれの詩の独自な展開を予告しながら、かつ「落花」という共通事項を詠う。散るという共通の部分だけを見ると、以下のように落花が種々様々に描かれる。

①富逞穠華滿樹春香飄落瓣樹還貧　満開の花が散って貧相になる
②飄飄蕩蕩復悠悠樹底追尋到樹頭　花びらが舞いながら散る
③是誰揉碎錦雲堆着地難扶氣力頽　錦雲のような花が力なく散ってしまう
④玉勒銀罌已倦遊東飛西落使人愁　遊びにも倦み、花が散って人を愁えさせる
⑤昨日繁華煥眼新今朝瞥眼又成塵　昨日の繁華が今日は塵になっている
⑥十二街頭散冶遊滿街紅紫亂春愁　繁華街の花が散って春の愁いに心が乱れる
⑦夕陽無那小橋西春事闌珊意欲迷　夕陽が沈むなか花が散っている
⑧一園桃李只須臾白白朱朱徹樹無　一園中の花があっという間に散ってしまった
⑨芳菲死日是生時李姝桃娘盡欲兒　花が散ると実ができる

⑩供送春愁上客眉亂紛紛地竚多時　愁いながら花の散るのを佇んで見る

花があっという間に散ってしまったことを言うのが①③⑤、今盛んに散っていることは②、花が散ってしまったことにより④⑥は楽しみが尽き愁いが増すことを言う。

花が散るという共通部分以外に、例えば④「玉勒銀罌已倦遊」⑥「十二街頭散冶遊」のように、花を楽しむ「男性」がいることを明らかにして、「女性」の存在を暗示したり、その後の展開で女性に焦点を当てたりする。花は女性であり、落花を具体的にどう詠うかによって詩的世界が変わってくる。

二、「落花詩」における女性

詩中に女性が明確に描かれるのは、①⑥⑦である。順に検討してみよう。

①富逞穠華滿樹春、香飄落瓣樹還貧。紅芳既蛻仙成道、綠葉初陰子養仁。
偶補燕巢泥薦寵、別修蜂蜜水資神。年年爲爾添惆悵、獨是蛾眉未嫁人。

富逞す穠華満樹の春、香は落瓣を飄はせて樹還た貧なり。紅芳既に蛻して仙は道を成し、緑葉初めて陰りて子は仁を養ふ。偶たま燕巣を補ひて泥は寵を薦め、別に蜂蜜を修めて水は神を資（たす）く。年年爾が為に惆悵を添ふるは、独り是れ蛾眉の未だ嫁がざる人。

「春、木々いっぱいに豊かに美しく咲いていた花は、香りを漂わせて散ってしまい、すっかり貧弱になった。赤い花が散ったあとには仙界への道ができ、緑の葉陰で実が成り始める。雨のあと、燕は巣を繕うために花びらのまじる泥を銜えて運び、水滴は蜜蜂の巣で蜜になっていく。毎年落花をみて悲しい思いを懐くのは、まだ嫁いでいないうら若き女性。」

この詩は「落花」による「惆悵」（第七句）を詠い、その「惆悵」の由来を提示する。連作十篇の総論的な詩である。「蛾眉未嫁人」が詠われるのは、この十首全体が女性の悲しみを詠うもの、と見ることもできる。

第四句の「緑葉初陰子養仁」は、杜牧の故事を踏まえている。杜牧が湖州に遊んだとき十余歳の美人を見初め「十年後に嫁に貰いに来る、もし来なければ他家に嫁いでもよい」と言って去った。十四年後やって来ると、その女性は十年待って嫁いだという。そこで杜牧は別れを悵んで「自ずから是れ春を尋ねて去ること較や遅し、須ゐず惆悵して芳時を恨むを。狂風吹き尽くす深紅の色、緑葉陰を成して子枝に満つ」と詠った[5]。

花が散って実ができるというモチーフは、⑨にも見られる。人間なら子ができることであるが、この詩の第八句の「未嫁人」には子どもを授かる機会がない。

それ故に「独り惆悵する」のである。

頸聯では周囲の小動物に視線が注がれる。燕が巣を繕うために泥を運ぶようす、蜂が蜜を作るようすは、落花のあと「子が仁が養う」と同じ流れにある。燕が巣を繕うのは「古詩十九首」に「思う双飛燕と為りて、泥を銜みて君が屋に巣くはんことを[6]」とあるように新婚の男女が仲睦まじく暮らすようすを連想させる。蜜蜂もまさに巣作りの時期で蜜を集めるのに忙しい[7]。宋の方岳に春風は「燕の与(ため)に泥を作り蜂に蜜を醸させ、小雨を吹いたかと思うとすぐに晴れをもたらす[8]」ともある。泥を作るには雨が必要であるし、「水資神」とあるのも小雨がふって晴れたということでもある。

花が散っても新婚の二人には憂いはない。頷聯・頸聯で詠われるように未来への希望もある。が、尾聯では、毎年「蛾眉の未だ嫁がざる人」が「爾(なんじ)の為に惆悵を添える」と言う。「爾」は散る花。まだ嫁いでいないうら若き乙女は散る花を見ては毎年愁いを添える、と言うのだ。

「落花」は一般的に「惜春」「傷春」「春愁」を詠う。が、沈周のこの詩の春愁は、結婚のように本来あるべき調和が満たされない思いを詠う。落花を見て春を惜しむという従来の詠い方とは違っている。頷聯のように典故を踏まえたり、頸聯のように小動物を詠ったりして工夫が凝らされる。

⑥十二街頭散冶遊、滿街紅紫亂春愁。知時去去留難得、悟色空空念罷休。
朝掃尚嫌奴作踐、晩歸還有馬堪憂。何人早起酬憐惜、孤負新粧倚翠樓。

十二街頭冶遊散じ、満街の紅紫春愁を乱す。時の去り去って留むること得難きを知り、色の空空たるを悟りて念ひ罷休す。朝に掃ひて尚ほ奴の踐を作すを嫌ひ、晩に帰りて還た馬の憂ふるに堪へたる有り。何人か早に起きて憐惜に酬ひ、新粧に孤負して翠楼に倚る。

「繁華街から冶遊の人がいなくなり、街には紅紫の花が散り敷いて春の愁をかきたてる。時は過ぎ去るだけで留めることはできないことを知り、人の世の空しいことを悟って未練もなくなった。それでもなお、朝に掃き清める召使が花びらを踏みつけるのがたまらなく嫌になり、夜に帰って来ては、また馬が花びらを踏み散らすのに堪えている。いったい誰であろうか、朝、早起きして憐惜に酬いようと、新たな化粧を涙で濡らしながら翠楼にもたれているのは。」

「新粧」「翠楼」から、王昌齢の「閨怨[9]」が思い浮かぶ。結婚したての若妻は、花の散ることを止められないことも、色が移ろうことの空しいことも悟っている。自分が老いていくことは、分かる。が、散った花びらが奴や馬に踏みにじられることを嫌い、誰もいない早朝に化粧をして翠楼から落花をながめ「憐れみ惜しむ」のである。

⑦夕陽無那小橋西、春事闌珊意欲迷。錦里門前溪好浣、黄陵廟裏鳥還啼。
焚追螺甲教香史、煎帶牛酥囑膳嫒。萬寶千鈿眞可惜、歸來直欲滿筐携。

夕陽那(いか)んともする無し小橋の西、春事 闌珊 意迷はんと欲す。錦里門前 溪(たに)浣(あら)ふに好し、黄陵廟裏 鳥還(ま)た啼く。焚いて螺甲を追(おく)りて香史に教へ、煎て牛酥を帯びて膳嫒に嘱す。万宝 千鈿 真に惜しむべし、帰来直ちに筐に満たして携へんと欲す。

「夕陽は留めようにも留められず小橋の西に沈みゆき、春の遊びも終わりに近づき、心が迷う。錦里門の前の渓川で錦を濡らすこともできるし、黄陵廟の中ではなお鳥が美しい声で鳴いている。香史に焼いた貝の料理を届けさせ、下女に温かい牛酥を持たせてここにやってきた。額の花鈿の飾りのようなたくさんの宝石（＝落花）をそのままにしておくのは惜しい。帰るときには、きっと筐一杯にして帰ろう。」

「夕陽無那小橋西」から、一日中花を見て楽しんでいたことが想像される。「無那」は、どうしようもない、いたしかたない。ここは、夕陽が沈むのを停めたいと思ってもどうしようもなく、日は沈んで行く、と時間の過ぎていくことをいう。「闌珊」は衰えるさま。「錦里門前溪好浣」は、昔成都で織った錦を川の水で洗ったことを踏まえ、綺羅を着た女性たちが水辺で遊ぶようすを言うのであろう。「黄陵廟」は洞庭湖中の君山や宜昌にあるが、ここではその名を借りて蘇州近郊の廟の近くで遊んでいることを言うのであろう。具体的に場所を特定できないが、女性たちの華やかな花見の会が連想される。それを裏付けるのが、「螺甲」貝のニナを、「焚追」焼いて届けさせたり、「香史」に「煎帯」暖めた「牛酥」（牛乳の酥）をたずさえさせている。「香史」は未詳。「追」は送るの意。「膳嫒」は、料理係の下女。女性たちの花見であることは、尾聯の万宝千鈿を「筐」竹製のカゴいっぱいにして帰ろうというところにも表れている。「鈿」は女性が額に飾るかざりであるが、ここでは美しい花びら言う。

以上、①は未婚の女性の惜春と惆悵、⑥は新婚の女性の惜春と未練、⑦は高貴な女性たちの惜春と悲しみが詠われる。

（５）北宋張君房『麗情集』、南宋計有功『唐詩紀事』に見える。詩の原文は『麗情集』では「自是尋春較遅、不須惆悵恨芳時。狂風吹盡深紅色、綠葉成陰子滿枝」。『唐詩紀事』では「較」を「校」に、「恨」を「怨」に作る。『杜牧集』は「歎花」と題して「自恨尋芳到已遅、往年曾見未開時。如今風擺花狼藉、綠葉成陰子滿枝」とある

（６）沈周の詩は「双飛燕」ではないが泥を銜んで巣を補うとあるのでつがいの燕が連想される。つがいの燕は、『詩経』邶風に「燕燕于飛、差池其羽。之子于歸、遠送于野。瞻望弗及、泣涕如雨」とあるように別れの象徴である。古詩十九首も沈周も新婚時の初々しさを言う。泥を銜える燕は、杜甫に「泥融飛燕子」（絶句）とある。

（7）蜂は、花柳の巷に遊ぶことを「蜂游」と言うように、男女の恋を連想させる。

（8）方岳「春思」に「春風多可太忙生、長共花邊柳外行。與燕作泥蜂釀蜜、纔吹小雨又須晴」とある。

（9）王昌齢「閨怨」に「閨中少婦不知愁、春日凝粧上翠樓、忽見陌頭楊柳色、悔教夫婿覓封侯」とある。

三、散ってしまった花びらと未練を残す花びらと

①を承けて②から⑤では散ってしまった花びらと未練を残す花びらが描かれる。

②飄飄蕩蕩復悠悠、樹底追尋到樹頭。趙武泥塗知[10]辱雨、秦宮脂粉惜隨流。
癡情戀酒粘紅袖、急意穿簾泊玉鉤。欲拾殘芳搗爲藥、傷春難療個中愁。

飄々蕩々復た悠々、樹底より追尋して樹頭に到る。趙武の泥塗は雨に辱(はずか)しめらるるを知り、秦宮の脂粉は流れに随ふを惜しむ。癡情 酒を恋ふて紅袖に粘(つ)き、急意 簾を穿ちて玉鉤に泊(とどま)る。残芳を拾ふて搗(つ)きて薬を為(つく)らんと欲するも、傷春 療(いや)し難し個中(こちゅう)の愁。

「飄々蕩々また悠々と、樹の下の方から相追うように樹の上の方へ舞い、やがて地面に落ちてゆく。趙武が部下に雨露のめぐみを施さず辱めを与えたように、道に落ちた花びらは雨に打たれて泥まみれになり、秦の阿房宮から脂粉が御溝に流れるように、水に散った花は無残にも流されて行く。花びらのなかには、酒が恋しいかのように紅袖に貼りついたり、あわてて簾を穿って玉鉤に留まったりするものもある。散り残った花を集めて搗いて薬を作ろうと思うが、薬ではこの傷春の愁を癒すことはできない。」

①では花の散るようすは具体的に描かれなかったが、②の首聯ではそれを補うかのように花の散るようすから始まる。「飄飄蕩蕩」また「悠悠」と、そして木の下のほうから上へと、ダイナミックに豊かに花が舞う。

頷聯「趙武泥塗知辱雨」は、戦国時代の趙武の話を踏まえるのであろう。『左伝』襄公三十年に、七十三歳の老人を杞の城普請に駆り立てたことを恥じた趙武が「あなたのような人を粗末に扱い、土にまみれたままにして久しく気がつかなかったことは、私の罪です。謹んで不才をお詫びします」と言う場面がある[11]。「知辱雨」、雨露（恩沢）を与えるべき人（趙武）が恩沢を施さず却って辱めた、ということであろう。花に譬えるならば、むざむざ泥にまみれさせたということ。

「秦宮脂粉惜隨流」は杜牧『阿房宮賦』を踏まえる[12]。毎朝宮女たちの化粧の脂粉が御溝に流れ出すことが描かれている。この詩は、散った花が宮女の脂粉

のように水に流されていくことを言う。

頸聯は、起承転結の転にあたる聯で、小さな花びらに視線を移し、恋に迷い酒におぼれるかのように紅の袖に花びらが張りついたり、慌てて簾を通り抜けようとして玉の鉤にさまたげられることを描く。消え去ることのない「癡情」＝未練、「急意」＝あわただしく散ってしまう儚さ、紅い袖に着いたり簾の鉤にひっかかったりと、花は作者の心にいつまでも忘れ得ないものとして詠われる。

そこで尾聯は、散った花を拾いあつめ、搗いて薬を作り、心の傷を癒そうとするが、ついに傷春の悲しみは癒すことはできない。

②は①より更に描写が細やかで具体的である。「秦宮脂粉」「戀酒粘紅袖」「穿簾泊玉鉤」から、やはり女性が主体の描写である。

③是誰揉碎錦雲堆、着地難扶氣力頽。懊惱夜生聽雨枕、浮沈朝入送春杯。
梢傍小剰鶯還掠、風背差池鳩又催。瞥眼興亡供一笑、竟因何落竟何開。

是れ誰か錦雲の堆(うずたか)きを揉碎す、地に着きて扶(たす)け難く気力頽る。懊惱夜生ず雨を聽く枕、浮沈朝に入る 春を送る杯。梢傍小(すこ)しく剰(あま)すも鶯還た掠め、風背差池(しち)として鳩又催す。瞥眼すれば興亡 一笑に供す、竟(つい)に何に因りてか落ち竟に何によりてか開く。

「これはいったい誰が錦の雲のようなたくさんの花を揉み砕いて散らしたのだろうか、あっという間に花は散り、地に落ちた花は生気なく、もとの枝に戻すことはできない。夜、枕の上で雨の音を聴いては、散った花が雨にまみれることに悩み苦しみ、朝、春を送る杯になおも花びらが入りこみ、浮き沈みする様子を見て悲しくなる。梢のあたりに少し散り残っている花は鶯が散らしてしまうし、風に背いて力強く飛ぶホトトギスが、また花を散らそうとする。思えば世の興亡は一笑のうちの出来事、結局、花はなぜ散り、なぜ開くのか。」

首聯は、「錦雲」のようにうずたかく重なる美しい花が、あっという間に散り、地面に力なく散ったままになっているようすである。誰かが「錦雲」をもみくちゃに砕いたと言い、地面に落ちた花びらは、もう枝に戻る力もなく廃れてゆく。「揉碎錦雲堆」「難扶氣力頽」からは、女性の妖艶さと気だるさが感じ取れる。

頷聯は、夜に降りだした雨の音を聴いて、散った花びらが濡れることに「懊悩」し、朝には花びらが杯に散りこんできて「浮沈」するのを見て、わが身の浮沈と重ねる。女性のせつない「思い」が詠われる。

頸聯は、梢にすこし散り残っている花を鶯が掠めとり、風にも散らずに残っている花を杜鵑が散らしてしまうことをいう。咲いた花は、いずれは散ってしまうのだが、ひととき散り残っても、さらに外的な要因で散らされてしまう不条理。

尾聯。一瞥一笑のあいだに花は散ってしまう。花はなぜ咲き、なぜ散るのか。世の興亡と同じように、咲いたものは散る。栄えていてもすぐに滅び、咲いた花

もすぐに散ってしまう、と、栄枯盛衰・無常を言う。

これまでの詩は、花が散る様子や散ってしまった様子を具体的に、あるいは典故を用いて詠っていた。①では花が散ったあとの自然界が詠われ、蜂や燕などの小動物が描かれていた。この詩では、「懊悩」「浮沈」と情が直截的に詠われ、作者の情が前面に出ている。また、これまでは「惜春」が主だったが、ここでは「瞥眼興亡」と、人生「無常」の思いを詠う。

④玉勒銀罌已倦遊、東飛西落使人愁。急攙春去先辭樹、嬾被風扶強上樓。
魚沫劬恩殘粉在、蛛絲牽愛小紅留。色香久在沈迷界、懺悔誰能倩比丘。

玉勒銀罌已に遊ぶに倦み、東に飛び西に落ちて人をして愁へしむ。急いで春の去るに攙（さき）んじて先づ樹を辞し、嬾（らん）として風に扶けられて強ひて楼に上る。魚沫は恩（おん）に劬（むく）いて残粉在り、蛛糸は愛を牽きて小紅留む。色香久しく沈迷界に在り、懺悔誰か能く比丘に倩（こ）はん。

「馬に乗って花を尋ね、花見の宴をひらいて美酒を飲み、飽きるほど遊んだが、今は至るところ花が散り人を悲しくさせる。花は春が終わりそうになると真っ先に木から離れ、物憂げに風に吹かれてわざと楼の中に入ってくる。魚は恩を労うかのように、吐く泡に花粉を着け、蜘蛛は恋人を引き付けるかのように、糸に小さな赤い花びらを留めている。花の色香はずっと沈迷の世界にある。僧侶に頼んで、懺悔したいがそれもできない。」

花が咲いている間、人々は飽きるほど浮かれて遊び回っていたが、花が散ってしまうととたんに悲しくなる。頷聯は、花びらの散り舞う様子を、人に擬して詠う。春が終わろうとすると、気が萎えて急いで枝から離れ、風にあおられると、ものういようすで楼の中にまで入り込む、と。

頸聯では視線が下に向かい、魚の吐く泡や蜘蛛の糸に視線がそそがれる。「劬恩」は、きれいな花を見せてくれた「恩」にむくいるかのように、魚が泡を吐いてそこに花びらを着けていること。「牽愛」は蜘蛛が花に恋をするかのように、網に花を留めていることを言う。

「魚沫」「蛛絲」が対で用いられる詩句に、釋善珍「湖邊」に「水は魚沫を漂はせて花片を粘け、風は蛛絲を払って霞珠を落とす」(13)がある。「劬恩」は恩にむくいる、ねぎらうこと。

花の香りや美しさに心を奪われ、人はいつまでも浮き世に迷ったままでいる。だから比丘（僧侶）にお願いして懺悔し、迷いを解こう。しかしそれはできない。だから、人は永遠に落花によって悲しむ、という。詩の全体の流れと第七句の「色香久在沈迷界」からみると、この詩の主体は男性である。

⑤昨日繁華煥眼新、今朝瞥眼又成塵。深關羊戸無來客、漫藉周亭有醉人。

露涕烟洟傷故物、蝸涎蟻迹弔殘春。門墻蹊逕俱零落、丞相知時卻不嗔。

昨日の繁華眼に煥(あき)らかにして新たなるも、今朝瞥眼又塵と成る。深く羊戸を関(とざ)して来客無く、漫りに周亭に藉きて酔人有り。露涕烟洟故物を傷み、蝸涎蟻迹残春を弔ふ。門墻蹊逕俱に零落するも、丞相時を知り却って嗔らず。

「昨日の繁華は目にも新たに輝いていたが、今朝は瞬く間に塵となってしまった。来客もなく、家の戸は深く閉ざされたまま、亭の周りにはやたらに酔っ払いが草を敷いて酒を酌み交わしている。思い出の物に心を痛めるかのように露や靄がしっとりと花を潤し、行く春を弔うかのようにカタツムリや蟻は跡を残して動いている。門や垣根にも、また小径にも、等しく花が散り敷いている。だが花が咲けば散る時があることを知っている丞相は、花が先を争って散っても、怒ったりはしない。」

首聯は、爛漫と咲いていた花が、あっと言う間に散ってしまったことを言う。内容は①③④と同じであるが、ここは、昨日と今日という時間の幅を詠いこんでいる。「羊戸」は小さな家を言うのであろうか。何やら曰くがありそうだが、不詳。花が終わってから誰も訪ねてこない、ただやたらに亭の周りで酔っ払いが酒を飲んで、春の余韻を楽しんでいる。頸聯の「露涕烟洟」「蝸涎蟻迹」は、散った花に霧やモヤがかかり、蝸牛が這ったり、蟻が歩いていたりすること。頷聯を承けて、露煙が涙をながしているようだ、蝸蟻が足跡を印して春を惜しむようだと擬人化し、「故物」、散った花を傷み、残春を弔っている、と言う。

尾聯の「丞相知時卻不嗔」に似た表現に、黄山谷の「梅蘂先を争ふも公嗔らず[(14)]」がある。花が咲けば散る時が必ずあることを公は知っている、だから嗔ることはないのである。

この⑤も詩の主体は男性である。

（10）文徵明の真跡は「之」になっていて見せ消がついている。顧文彬『過雲楼帖』並びに『沈周集』は「知」に作る。

（11）『左伝』襄公三十年「使吾子辱在泥塗久矣。武之罪也。敢謝不才（「吾子をして辱しめて泥塗に在らしむること久し。（趙）武の罪なり。敢えて不才を謝す。）」とある。「吾子」は趙武の部下で県令をしていた者が城普請として徴発した老人である。

（12）杜牧『阿房宮賦』に「綠雲擾擾、梳曉鬟也。渭流漲膩、棄脂水也（緑雲擾擾たるは、暁鬟を梳るなり。渭流漲膩するは、脂水を棄つるなり」とある。

（13）宋、釋善珍『藏叟摘稾』。七言律詩の「湖邊」に「水漂魚沫粘花片、風拂蛛絲落霞珠」とある。

（14）『山谷詩集注』巻十五（中国古典文學基本叢書、中華書局）「梅蘂爭先公不嗔、知公家有似梅人。何時各得自由去、相逐揚州作好春」とある。

四、老いた我が身を

⑧から⑩は、作者の思いが前面に詠われる。また、花そのものを詠う聯が再び見られる。

⑧一園桃李只須臾、白白朱朱徹樹無。亭怪艸玄加舊白、窓嫌點易亂新朱。
無方漂泊關遊子、如此衰殘類老夫。來歲重開還自好、小篇聊復記榮枯。

一園の桃李只だ須臾、白白朱朱樹を徹して無し。亭には怪しむ艸玄（くさくろ）くして旧白を加へ、窓には嫌ふ点じ易くして新朱乱る。方（ほう）無くして漂泊するは遊子に関り、此くの如く衰残するは老夫に類す。来歳重ねて開けば還（ま）た自ら好からん、小篇聊か復た栄枯を記さん。

「園いっぱいに桃李の花が咲いていたのはほんのわずかな時間、いまは白い花も紅い花もすべての木から無くなってしまった。亭のあたりでは、不思議なことに赤黒い草に旧い白い花びらが散り、窓には嫌になるほど新しい紅い色が乱れて着いている。花びらは行く先もなく漂って、まるで旅人のよう。このように衰えて無残なさまは老夫のようだ。まことに結構なことに、来年も今年と同じように花はまた開く、それをいささかまた栄枯の小詩として記そう。」

「玄」は黒い。『詩経』に「何草不玄」（小雅）とある。「聊」は、少し、しばらく。

首聯はあっという間に花が散ったことを言い、頷聯では、どこにどのように花びら散っているかを具体的に言う。散ってしまったという事実からすると、黒いほどに緑が濃くなった草になおまだ白い花がついているし、嫌になるほどやすやすと新たな朱色の花びらが窓についている。なぜ「怪しみ」「嫌う」のか。もちろん、もうすべて散ったはずなのに、それでもなお草や窓に花びらついているうえに、それがまるで遊子のようであり、また衰残の老人のようだからである。頸聯に云う、「方無くして漂泊するは遊子に関り、此くの如く衰残するは老夫に類す」と。

来年の花は今年とは違うだろうが、どんな小さな変化でも記してみよう、とは、あと何回花を見ることができるかという思いでもある。老残の身であっても、いや老残だからこそ、「来年」が待ち遠しい。第七句「來歲重開還自好」と来年への期待を込めて詠うのは、この連作のなかでは新たな展開である。これまでの詩の半数は「女性」が主体だったが、この詩では花の散り敷くようすを「如此衰殘類老夫」（第六句）といい、「男性」である作者が前面に出て未来の花を「小篇」に記そうと言う。連作の詩は、いよいよまとめへと向かう。

⑨芳菲死日是生時、李姝桃娘盡欲兒。人散酒闌春亦去、紅銷綠長物無私。

青山可惜文章喪、黄土何堪錦繡施。空記少年簪舞處、飄零今日髩如絲。

芳菲の死するの日は是れ生まるるの時、李姝桃娘尽く児あらんと欲す。人散じ酒闌にして春も亦た去り、紅銷へ緑長じて物に私する無し。青山惜しむべし文章の喪はるるを、黄土何ぞ堪へん錦繡の施すに。空しく記す少年簪舞の処、飄零今日髩糸の如し。

「花が死ぬ日は新たに命が生まれる時、桃李もすべて実を結ぼうとする。人が散り酒宴が止むと春もまた去り、紅の花が消え緑の葉が大きくなって、物みなすべて私することはない。青山に文模様がなくなるのは寂しく、黄色い大地が秋の錦繡に染まるのには堪えられない。簪をきらめかせながら舞った若いころを空しく思い出しては、今は髪も白くなり落ちぶれてしまったことを嘆く。」

花の散ってしまったようすを第二句で「李姝桃娘尽く児あらんと欲す」と言い、第四句では「紅銷緑長」と言う。これは①の「紅芳既蛻仙成道、緑葉初陰子養仁」と同じ。①ではそれを見て、まだ嫁いでいない娥眉の人が羨み嘆いていたが、ここではすべてが自然の理に従って私することはないと言う。

後半は、花がすっかり散って夏から秋へと変わる季節を描き、それを繰り返して歳月を経て今は髪も白くなったと嘆く。落花をとおして人生の老いを言い、落花という事象によって引き起こされる無常を詠う。これも第一首と似ている。が、ここは作者沈周の情が中心に詠われる。

尾聯の「空記少年簪舞處」は、劉希夷の「代悲白頭翁」を意識している。「代悲白頭翁」全二十五句の第十五句から十八句に云う。

此翁白頭眞可憐、伊昔紅顔美少年。公子王孫芳樹下、清歌妙舞落花前。

此の翁白頭真に憐れむべし、伊れ昔は紅顔の美少年。公子王孫芳樹の下、清歌妙舞す落花の前。

「飄零今日髩如絲」は、杜牧の「題禪院」

觥船一棹百聞空、十歳青春不負公。今日鬢絲禪榻畔、茶煙輕颺落花風。

觥船一棹百聞空し、十歳の青春公に負かず。今日鬢糸禅榻の畔、茶煙軽く颺る落花の風。

どちらの詩も青春時代の華やかさと、老年の寂寞を詠うが、「代悲白頭翁」は、花吹雪を浴びる美女から詠いだされ、毎年落花に逢って顔色の改まるのを嘆き、その嘆きを承けて白頭の翁が青春時代を回想し、その華やかさに酔っているうちに鳥が悲しく鳴く、と言う内容である。全体の流れや措辞から、むしろ甘美な青春時代に力点が置かれている[15]。一方の「題禪院」は、青春時代の華やかさを回想しながら、ほろ苦い茶の煙につつまれる今の老年に力点が置かれる。

沈周は「代悲白頭翁」から青春時代を、「題禪院」から老年時代を摘出して、より甘美な青春時代と、より寂寞とした老年時代を描き出している。一人の詩人の詩句を援用するよりも二人の詩人の詩句を援用する方が、詩の世界はより広が

る。

明代中葉の詩壇は、北京を中心に李夢陽らの復古派が活躍し、南の呉（蘇州）には沈周を中心とする文人派が活躍していた。科挙に及第して南の呉から北の北京へ行ったのが徐禎卿である。李夢陽の復古は、やがて全国規模で古文辞運動として拡散する。明末清初の銭謙益はその古文辞派を「摸擬剽窃」として徹底的に批判する。「摸擬剽窃」とは、先人の詩句を未消化のまま自らの詩句に取り込むことで、出来た詩は詩的感興のないものとなる。沈周も先人の詩句を多く援用する。が、独自の詩的世界を創り出し、詩の世界に新たな可能性を拓いている。

李夢陽が「摸擬剽窃」として批判するのは、詩的感興のない「槎牙羃兀」なものである。徐禎卿を批評して、徐禎卿が科挙及第後、李夢陽と交遊して呉での詩風を改め「漢魏盛唐」へと赴いた、が、「中原の傖父」の「槎牙羃兀の習い」には染まらず、「標格清妍、摛詞婉約」であるという[16]。徐禎卿の「落花詩」は別に検討するが、沈周の詩はまさに「標格清妍、摛詞婉約」そのものである。

⑩供送春愁上客眉、亂紛紛地竚多時。儗招綠妾難成些、戲比紅兒殺要詩。
臨水東風撩短髩、惹空晴日共遊絲。還隨蛺蝶追尋去、牆角公然隱半枝。

供送して春愁客眉に上り、乱紛紛の地に竚むこと多時。緑妾を招かんと儗(ほつ)するも些(いささ)かをも成し難く、戯れに紅児に比せんには殺(かなら)ず詩を要す。水に臨めば東風短髩を撩(なぶ)り、空に惹(ひか)れて晴日遊糸を共にす。還た蛺蝶に随ひて追尋して去けば、牆角公然として半枝を隠す。

「宴を設けると春の愁いが客人の眉に上り、花が紛紛と乱れ散るなかしばらく立ち尽くす。緑妾を招こうにもとてもかなわぬこと、戯れに落花の美しさを紅児に比べて見たいがそれには詩を作らなければならない。水に臨めば春風と共に短鬢をなぶり、晴れた日なかに遊糸と共に空に漂う。蝶に導かれ後を追って行くと、垣根の角に花の着いた枝が公然と、半分顔をのぞかせている。」

「供送」は食事を供えて送ること。春を送る宴をいう。「客」は宴に招かれた客人。「緑妾」からは晋の汝南王の寵妾だったという「碧玉」が連想される。孫綽の「情人碧玉歌[17]」に「碧玉は小家の女」という。「小家の女」は卑賤な家の娘の意。卑賤な娘は緑の着物を着ていた。孫綽は「碧玉破瓜の時、相為に情顛倒す。君に感じて羞難せず、身を廻らして郎に就きて抱かる」とも詠う。「紅児」は唐の羅虬が養っていた妓女の杜紅児。羅虬は杜紅児と歴代の美女とを比べて七言絶句百首の「比紅詩[18]」を作った。

すっかり散ったと思ったのに、蝶を追って行ったら、まだ花があるではないか、という喜びで全編を締めくくる。

（15）劉希夷「代悲白頭翁」の全詩は以下のとおり。「洛陽城東桃李花、飛來飛去落誰家。洛

陽女兒惜顔色、行逢落花長歎息。今年花落顔色改、明年花開復誰在。已見松柏摧爲薪、更聞桑田變成海。古人無復洛城東、今人還對落花風。年年歲歲花相似、歲歲年年人不同。寄言全盛紅顔子、應憐半死白頭翁。此翁白頭眞可憐、伊昔紅顔美少年。公子王孫芳樹下、清歌妙舞落花前。光祿池臺開錦繡、將軍樓閣畫神仙。一朝臥病無相識、三春行樂在誰邊。宛轉蛾眉能幾時、須臾鶴髪亂如絲。但看古來歌舞地、惟有黄昏鳥雀悲。」

（16）銭謙益は『列朝詩集』丙集第九「徐禎卿小伝」で次のように云う。

「沈酣六朝、散華流豔。文章煙月之句、至今令人口吻猶香。登第之後、與北地李獻吉游、悔其少作、改而趨漢魏盛唐。呉中名士頗有邯鄲學歩之誚。然而標格清妍、摛詞婉約、絶不染中原傖父槎牙羃兀之習、江左風流故自在也。獻吉譏其守而未化、蹊徑存焉、斯亦善譽昌穀者與。（六朝に沈酣し、散華流豔なり。文章煙月の句、今に至るまで人の口吻をして猶ほ香らしむ。登第の後、北地李献吉と游び、其の少作を悔ひ、改めて漢魏盛唐に趨く。呉中の名士頗る邯鄲学歩の誚有り。然れども標格清妍、摛詞婉約、絶えて中原傖父の槎牙羃兀の習に染まらず、江左の風流故より自ずから在り。献吉其の守りて未だ化せず、蹊徑存すと譏るは、斯れ亦た善く昌穀を誉むる者ならんか。）」

（17）孫綽「情人碧玉歌」其一に「碧玉小家女、敢不攀貴徳。感郎千金意、慚無傾城色（碧玉は小家の女、敢えて貴徳に攀ぢず。郎が千金の意に感ず、慚づらくは傾城の色無きことを）」と云う。其二「碧玉破瓜時、相為情顛倒。感君不羞難、廻身就郎抱」。

（18）『全唐詩』巻六六六。論文に斎藤茂氏「羅虬『比紅児』について」（人文研究大阪市立大学文学紀要第四七巻第三分冊、一九九五年十二月）がある。

おわりに

連作の詩は、一詩ごとに措辞や構成を工夫するとともに、全体の構成にも変化と抑揚が必要である。沈周の「落花詩」は一首ごとに詩の構成が変化し、十首を見渡した時には、何首かがまとまり、前詩を承けながら展開している。まず気がつくことは、最初の①と最後の⑩が逆の構成であることである。①の第七句「年年爲爾添惆悵」と⑩の第一句「供送春愁上客眉」が呼応しながら、①は毎年落花を見て惆悵を添えることを言い、⑩は蝶を追って行ったらまだ散り残っていた花があったと言う。

①は全体のプロローグ。落花詩のテーマを提示する。未婚の女性の目を通して春愁を詠うことによって、十首全体が、また「落花」の美しさと儚さが、「女性」のそれと重なっていることを暗示し、さらに⑥では新婚の女性、⑦で高貴な女性たちの郊外での花見を描く。①の女性を承けて、②③は女性が主体であるが、④⑤では主体が男性に傾き、⑥⑦で再度女性と落花を意識させる。

②は①で表現できなかったこと、つまり花が散ることに焦点を当てて詠い、

「愁」を明らかにする。②から④は、それぞれ前詩を承けながらさらに細部を描写したり、また補ったりしながら詠う。いずれも風景をより具体的に描写している。

詩のおもしろさは、落花の風景をどう描写するか、また落花をまったく描写せずに落花をどう詠うか、にかかっている。主に風景を詠う①では、典故を用いながら未婚の女性の悲しみと落花を重ねている。

「落花」そのものを描写せずに落花を想像させる詩は、⑤⑥⑦⑨である。⑤⑥⑨はやや説明調であるが、⑦は夕焼けに染まる川や鳥の鳴き声が詠われ、落花が「萬寶千鈿」と表現され、優雅な花見と惜春をみごとに詠っている。

風景を描写するとき、小動物がたくみに詠いこまれることも注意しておきたい。画家ならではの視点である。

①偶補燕巣泥薦寵、別修蜂蜜水資神。（頸聯）

③梢傍小剰鶯還掠、風背差池鳩又催。（頸聯）

④魚沫劬恩殘粉在、蛛絲牽愛小紅留。（頸聯）

⑤露涕烟洟傷故物、蝸涎蟻迹弔殘春。（頸聯）

⑩臨水東風撩短髩、惹空晴日共遊絲。（頸聯）

小動物は落花を詠うためには無くてはならない詩材であるが、小動物をすべて頸聯に配置しているのは、沈周の詩の構成法の一つと言うこともできよう。当然のことながら、詩語はすべてテーマに沿い、無駄がない。

女性の視線で落花を詠う流れは、⑧で地に落ちた花を「如此衰殘類老夫」と言って男性の視線へと変える。⑧から⑩は、散らずに残っている花を詠う⑩へと収束させるべく、作者沈周の情が、景とともに詠われる。衰残の身であるが故に、「來歲重開還自好、小篇聊復記榮枯」と来年の僅かな変化も詠おうという、新たな展開をみせる。しかし⑨「空記少年簪舞處、飄零今日髩如絲」と、来し方を思い出しては、少年の時代が瞬く間に過ぎて白髪頭となったことを強調し、哀惜の情を深めながら、最後の⑩で「還隨蛺蝶追尋去、牆角公然隱半枝」と、蝶のあとを追って垣根に隠れるように咲いている花を見て喜ぶ。

こうして見てくると、「落花詩」十首は、花と女性を重ねながら、花が散り春が行く愁いを、作者の少年期、壮年期、そして老年期のそれぞれに沿いながら詠っていることが分かる。表現は、少年期はより写実的にそして艶冶に、壮年期はより象徴的に落ちついて、老年期は写実のなかに老いの悲しみをにじませる。

老師七十八歳の香気溢れる作品に、若い文徵明（三十五歳）と徐禎卿（二十五歳）がただちに唱和したのも宜なるかなである。

（わしの　まさあき・教授）